The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	清華簡『楚居』の劃線・墨線と竹簡の配列
Author(s)	竹田, 健二
Citation	中国研究集刊. 2013, 56, p. 66-82
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58676
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊 號号（総五十六号）平成二十五年六月　六五―八一頁

〔特集二〕

清華簡『楚居』の劃線・墨線と竹簡の配列

竹田健二

はじめに

およそ竹簡資料が出土した際に、竹簡と竹簡とを綴る編縄が元の状態のまま残り、冊書が良く保存されていることは極めて少ない。このため、もとの文献を復元する整理作業において、出土した竹簡を改めて配列し、編聯を復元することが行われる。また、残欠している断簡と断簡とを綴合して、一枚の整簡に復元することも行われる。

もっとも、特に伝世文献と対照することのできない古佚文献については、最初の釈文（以下、原釈文）が整理者の手によって公表された後、その竹簡の配列の復元や断簡の綴合に対して、原釈文と異なる見解が次々と提示されることがしばしばある。竹簡の配列の復元や断簡の綴合は、いうまでもなくその文献の釈読に多大な影響を及ぼす。このため、如何に客観的な根拠に基づいて復元を行うかは、極めて重要な問題である。竹簡の形制、或いは記されている文字の様式など、さまざまな角度から慎重に検討を加えた上で、可能な限り整合的に文献の復元を行う必要がある（注1）。

竹簡の配列の復元に関して、復元の客観的な手掛かりとなる可能性があるとして、二〇一一年以降注目されているのが、「劃痕」もしくは「劃線」と呼ばれる竹簡の背面に記された線、及び同じく竹簡の背面に記された「墨線」と呼ばれる線である。その発端となったのは、孫沛陽氏が北京大学において収蔵されている漢簡の背面に記された「劃痕」の存在を指摘したことである（注2）。

小論では、『清華大学蔵戦国竹簡（壹）』（中西書局、二〇一〇年）に収録されている古佚文献『楚居』に関して、その竹簡の配列の復元に劃線・墨線がどのような意味を持つのか、検討を加える(注3)。

一、『楚居』の竹簡背面の状況

先ず、『清華大学蔵戦国竹簡（壹）』に収められている【説明】【釈文】及び写真等に基づき、『楚居』の竹簡の形制、及びその背面の状況について確認しておく。

『楚居』の竹簡は合計一六枚、その形制は簡長四七・五cm前後、編綫は三道である。簡7・9・10・11は下部の竹節の部分から竹簡の下端にかけて残欠し、この残欠した部分にはそれぞれおおよそ四字程度の文字が記されていたと推測される。また、簡1・6・15は第三編綫から竹簡の下端にかけて残欠している。但し、残欠の無い竹簡の状況から判断して、簡1・6・15の残欠した部分にはもともと文字が記されていなかったと推測される。

なお、付録の表によれば、簡2は竹簡の上端が残欠しているとされているが、断簡との綴合が行われて整簡に復元されており、やはり文字の欠落は認められない。また付録の表によれば、簡14も断簡との結合によって整簡に復元されている。

続いて、『楚居』の竹簡の背面の情況について確認しよう。『楚居』の竹簡の背面に関しては、以下の四点が注目される（図1）(注4)。

第一に、「簡序編號」、すなわち竹簡の配列を示す数字

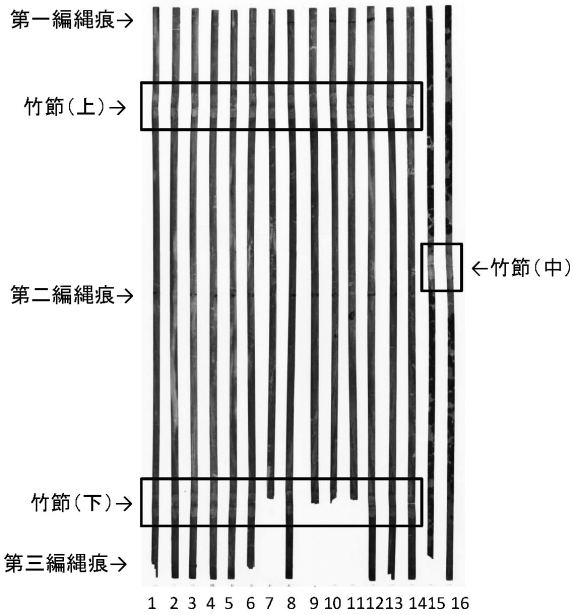


図1　『楚居』竹簡背面の状況

についてである。『楚居』の竹簡背面には、「簡序編號」は記されていない。これまで公開された清華大学所蔵の戦国竹簡（以下、清華簡）第一・第二分冊中の文献において、第一分冊の『尹至』・『尹誥』・『耆夜』・『金縢』・『皇門』・『祭公』、及び第二分冊の『繫年』の竹簡の背面には、各文献における竹簡の配列を示す通し番号の数字が記されている。しかし、『楚居』の竹簡背面には、第一分冊の『程寤』『保訓』と同様に、そうした配列を示す数字が記されていない。

第二に、竹節を削った痕跡についてである。清華簡の竹簡の背面には、竹節を削った痕跡がしばしば認められるが、『楚居』の竹簡背面においてもそうした現象が存在する。注目されるのは、竹節の痕跡の数及び位置が、『楚居』の一六枚の竹簡の中で一様ではないという点である。『楚居』の中には、竹簡背面の上部と下部との二箇所に竹節が存在する竹簡（簡1～14）と、竹簡背面の中央一箇所のみに竹節が存在している竹簡（簡15・16）との、二種類の竹簡が存在するのである(注5)。

もとより、竹簡の背面の竹節を削った痕跡の数と位置とが異なっていること自体は、竹簡の表面に対して何ら影響を及ぼすところがない。このため、およそ出土した竹簡の背面の情況が詳しくは分からなかった従来の観点からすれば、竹簡背面の竹節の位置や数が異なっていても、竹簡の形制としてはまったく同一ということとなる。しかし、後述するように、この竹節の痕跡の数及び位置の問題は、劃線の連続との間に関係があり、注目する必要があると考えられる。

第三に、『楚居』の一部の竹簡背面には、右下がりの劃線が認められる点である。劃線に最初に注目した孫沛陽氏が『楚居』の劃線についてどのように見ているのかを、氏の「簡冊背劃線初探」によって確認しておく（図2）(注6)。

孫氏は、『楚居』簡2～簡6には竹簡の背面に劃線が存在するとした上で、その劃線は、竹簡の正面を向かって右から左へと並べた場合、つまり簡2の左隣に簡3、簡3の左隣に簡4、という形に並べた場合、竹簡背面における劃線が連続しないことになると指摘する。つまり、竹簡の正面を向かって左から右に並べた場合、つまり簡2の右隣に簡3、簡3の右隣に簡4、という形に並べた場合にはじめて、竹簡の背面の劃線が連続するのである。このことについて孫氏は、「按照簡序，正面依從左到右的順序編配成冊，簡背劃線部分連貫。我們稱之爲〝逆次簡冊背劃線〟。」（竹簡の順序について見ると、その正面は竹簡が左から右に順に配列されて簡冊を成してお

り、竹簡背面の劃線が部分的につながっている。我々はこれを「逆向きの簡冊背面の劃線」と呼んでいる）とし、一つの仮説として、『楚居』の記されていた冊書においては、竹簡の正面が向かって左から右に並ぶ形に配列されていた可能性があるとしている。

なお、『楚居』簡3～簡6の劃線は明らかに連続するが、簡2と簡3との間で劃線が少しずれている。このずれに関して孫氏は「廃簡」という考えを提示している。

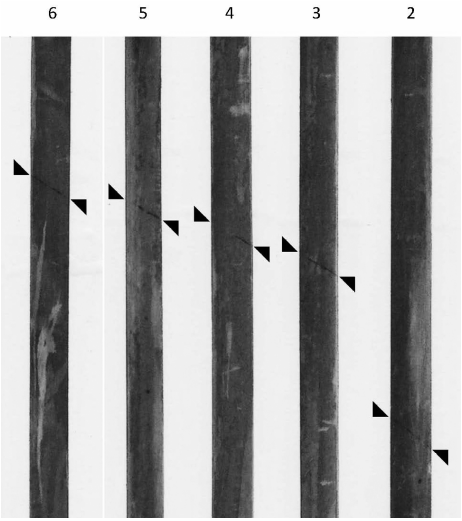


図2　『楚居』簡2～簡6背面の劃線

すなわち、ずれが起きている箇所にはもともと一枚から数枚の竹簡が存在しており、それらは何らかの理由により廃棄されたと考え、そうした「廃簡」を挿入したならば劃線は基本的に連続すると見なすのである。

なお、孫氏は「簡冊背劃線初探」において、『楚居』簡2～6以外の竹簡にも劃線がかすかに見えるが、写真でははっきりとはしないとしており、検討の対象とはしていない。しかし、私見では、写真から簡7・簡8・簡9にも劃線が存在する。この点については後に検討する。

第四に、李天虹氏が「湖北出土楚簡（五種）格式初析」において既に指摘するように、『楚居』の簡6の背面には、墨線が認められる。（図3）この墨線は、竹簡背面の上部にある竹節を削った痕跡の直下に記され、右上がりに傾斜している。ちなみに、孫沛陽氏はこの『楚居』の墨線に関しては言及していない。

以上、『楚居』の竹簡の形制、及びその背面の状況について確認した。次章では、『楚居』の竹簡背面の墨線について検討する。

二、『楚居』の墨線

前述の通り、『楚居』簡6の背面の上部の竹節のすぐ

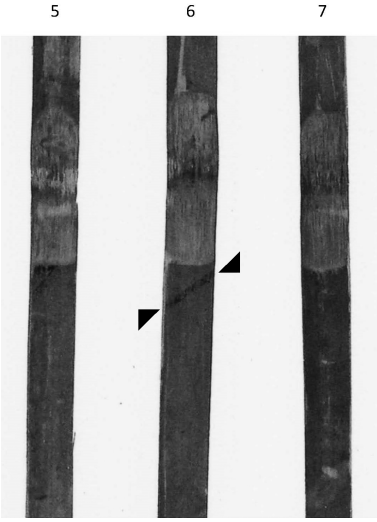


図3　『楚居』簡6背面の墨線

下の箇所には、右上がりの墨線が認められる。

ここで注目されるのは、簡6の左右に位置する簡5・簡7のみならず、『楚居』の竹簡には、その背面に簡6の墨線と連続する墨線を有するものが一枚も存在しないという点である。『楚居』の竹簡背面に簡6の墨線と連続するような墨線が存在しないことは、この簡6の墨線は竹簡の配列を解明する手がかりとはなり得ないことを意味する。

出土した竹簡の背面に斜めに墨線が記されているものがあることについては、既に孫氏も指摘しているように、上博楚簡や包山楚簡においても確認できる（図4・5）(注7)。しかし、上博楚簡及び包山楚簡の中で竹簡の背面の写真が公開されているものは、篇題などの文字が記されているといった特殊な場合に限られている。このため、その墨線が果たして左右に位置する竹簡に連続しているのかどうかは確認できない。

しかしながら、筆者が二〇一二年八月に上海博物館を

図4　包山楚簡の墨線

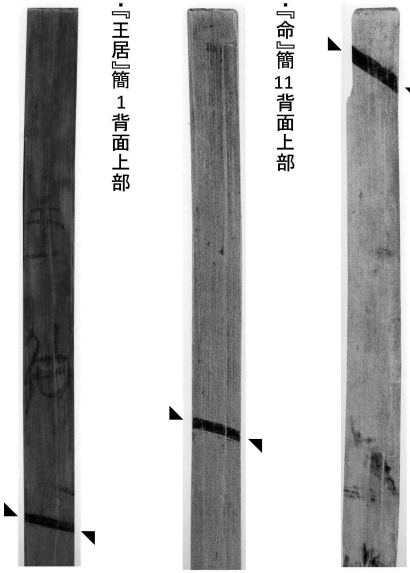
・『包山楚簡』簡一七背面上部

・『包山楚簡』簡一一九背面上部

・『包山楚簡』簡一五五背面上部

・『包山楚簡』簡二〇二背面上部

図5　上博楚簡の墨線



・『莊王既成』簡1背面上部

・『命』簡11背面上部

・『王居』簡1背面上部

訪問した際、博物館の研究員である葛亮氏と面談して伺った話によれば、『上海博物館蔵戦国楚竹書』の第八分冊に収録されている『志書乃言』・『王居』・『命』の三篇には、その竹簡背面に複数の竹簡にまたがる墨線があるとのことであった(注8)。『志書乃言』・『王居』・『命』の三篇の中で、現時点で竹簡背面に記されている墨線を確認することができる竹簡は、篇題が記されている『命』簡11の背面のみである。仮に葛氏の言うように、この『命』簡11の墨線がその左右に位置する竹簡の墨線と連続し、複数の竹簡にまたがって存在するものであるとするならば、そうした墨線は竹簡の配列を示すものとして理解できる可能があるということになる。

もっとも、葛氏の発言を直接裏付ける資料が公開されていない以上、竹簡背面の墨線が一枚の竹簡のみに記されているものなのか、それとも複数の竹簡にまたがって記されているものなのかは、今のところ不明とせざるを得ない。

仮に、葛氏の発言が資料的に裏付けられたとしても、竹簡の背面の写真がすべて公開されている清華簡の『楚居』において、簡6の墨線と連続する墨線が明らかに存在しないことは、或る文献において竹簡背面の墨線は必ずしもその左右に位置する竹簡と連続するというわけではなく、一枚の竹簡だけに単独で記され、竹簡の配列を解明する手がかりとはなり得ない場合も存在することを示している。包山楚簡や他の上博楚簡の中の背面に墨線が記されている竹簡について、果たしてその墨線のすべてが左右に位置する竹簡にもまたがって連続しているのか、それともすべてがそうなのではなく、一枚の竹簡だけに記されているものが含まれているのかはもとより不明であるが、包山楚簡や他の上博楚簡の中にも『楚居』

簡6のように、複数の竹簡にはまたがっていない墨線も存在する可能性が十分にあると推測される。

この『楚居』簡6の墨線のように、他の竹簡には連続することなく、一枚の竹簡の背面だけに記された墨線は、どの段階で記され、何を意味するものなのであろうか。こうした単独の墨線は、それぞれの竹簡が作成された後、まだ書写や編綴が行われていない時点で記されたものとも、また書写や竹簡の編綴が行われて冊書となった後に記されたとも、いずれの可能性も考えられる。十分な資料が得られない現時点では、こうした点についても不明とせざるを得ないが、仮に書写や竹簡の編綴が行われて冊書となった後に記されたとするならば、冊書全体に対して付けられた記号のようであったとも考えられよう。私見では、後述するように劃線にはおそらくはまだ書写や編綴が行われていない時点で竹簡の背面に記されたと考えられるものがあることから、墨線も同様に、まだ書写や編綴が行われていない時点で記された可能性が十分にあると思われる。

三、劃線

続いて、『楚居』の竹簡背面の劃線について検討する。

先述の通り、既に孫氏が指摘しているように、『楚居』簡2～簡6の背面には劃線が存在する。しかもそれは、竹簡の正面を上にして見た時に、向かって右から左にではなく、向かって左から右に簡2→簡3→簡4→簡5→簡6と順に並べた場合、その背面で特に簡3～簡6の劃線が明らかに連続する。このことから孫氏は、『楚居』の竹簡が、竹簡の正面を上にして見た場合に、竹簡は向かって左から右に並べられていた可能性があると指摘している。

以上の点に関して筆者は、結論から言えば、確かに孫氏が指摘したような可能性も一応は考えられるが、そうではなかった可能性も十分にあり、『楚居』についてはむしろ、劃線の連続を根拠に竹簡を配列することには問題があると考える。詳しくは後述するように、劃線を根拠として竹簡の配列を復原することが妥当ではない部分があり、竹簡が綴られて冊書が形制された際、その冊書は必ずしも劃線が連続する形となっていたとは限らないと考えるからである。

ここで特に注目したいのは、『楚居』の簡2～6以外の竹簡についてである。先述の通り孫氏は、この簡2～6以外の竹簡について、劃線がかすかに見えるものもあるが、写真でははっきりとは分からないとし、特に検討

を加えていない。しかし、私見では『清華大学蔵戦国竹簡（壹）』に収められている写真を見る限り、簡7・簡8・簡9においても劃線が存在していることを確認できる。しかも、簡7・簡8・簡9の三枚の竹簡の劃線は、竹簡の背面を上にして見た時に、向かって左から右に簡8→簡9→簡7と並べた時に連続するように見受けられるのである。

原釈文は、もとより竹簡の正面の文字列を簡7→簡8→簡9の順に釈読しており、この点については孫氏も同じ見解である。孫氏の指摘するように、『楚居』の竹簡が、その正面を上にして見た場合に向かって左から右に、簡7→簡8→簡9の順に並べられていたのだとするならば、竹簡の背面は左から右に、簡9→簡8→簡7の順に並べられていたということとなる。この時、簡9・簡8・簡7の背面に記されている劃線は連続しない。竹簡の背面が左から右に、簡8→簡9→簡7の順に並べられていたとした時にはじめて、これらの竹簡背面の劃線が連続するのである。（図6・7）

仮に、この箇所の竹簡の配列が、竹簡背面の劃線が連続するようになっていたものと考え、しかも孫氏の言うように『楚居』の竹簡は竹簡の正面を上にして見た場合に向かって左から右へと並べられていたとするならば、『楚居』の簡7・簡8・簡9の表面の文字列は、簡7→簡9→簡8の順に読まなければならないことになる。つまり、簡8の文字列と簡9の文字列とについて、その先後を入れ替える必要が生じるのである。

竹簡背面の劃線が連続することを手がかりとして、原釈文の竹簡の配列を修正した例としては、清華簡（一）に収められている『程寤』がある。『程寤』の原釈文において、簡5→簡6→簡7→簡8とされていた竹簡の配列に対して、復旦大学出土文献与古文字研究中心研究生読書会は、孫氏が指摘した竹簡背面の劃線の問題に着目し、簡5→簡7→簡6→簡8と、簡6と簡7との順番を

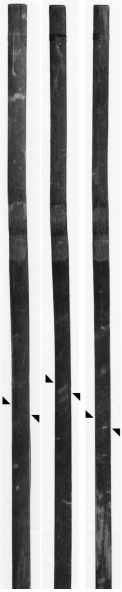


図6　『楚居』左から簡9→簡8→簡7の背面

図7　『楚居』左から簡8→簡9→簡7の背面

入れ替える説を提示した(注9)。このことは、竹簡の背面の劃線が注目される大きなきっかけとなったといってよい。(図8)

それでは、『楚居』についても、『程寤』のように竹簡の背面の劃線が連続するように竹簡を配列し、竹簡正面の文字列を簡7→簡9→簡8の順に釈読すべきであろうか。それとも、原釈文のように竹簡を配列し、つまり劃線が連続しない形に竹簡を配列して、その文字列を簡7→簡8→簡9の順で釈読するべきであろうか。

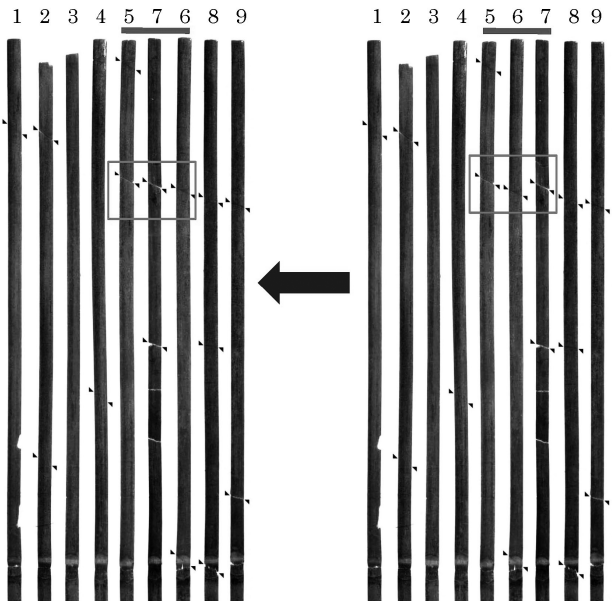


図8 『程寤』における竹簡背面の状況と配列の修正

結論から述べれば、筆者は原釈文と同様に釈読すべきであり、竹簡背面の劃線が連続しない、簡7→簡8→簡9の順に竹簡を配列して釈読するのが妥当と考える。

原釈文のように簡7→簡8→簡9と釈読した場合、この部分の文字列に記されている楚王の世系は、武王以降について「武王(簡7)→文王(簡8)→𡎺囂(莊敖)(簡9)→成王(簡9)」となる。これは『史記』楚世家に記述されている楚王の系譜と合致している。こうした伝世文献における記述との関係は、原釈文の作成に当たり、竹簡の配列を決定する重要な根拠となったものと推測される。

もちろん、『楚居』と『史記』楚世家との間には、記述されている楚王の系譜にいくつか相違する点が存在する。この点に関しては、既に浅野裕一氏が「清華簡『楚居』初探」において指摘している(注10)。すなわち、楚世家では楚の世系が黄帝から始まるが、『楚居』には黄帝から陸終までの系譜が無く、陸終の第六子の季連から始

まる点、また楚世家では霄敖→蚡冒の順序となっているところが『楚居』では逆に蚡冒→霄敖となっている点など、両文献における楚王の世系には相違するところがある。

しかし、全体としてみれば、両文献に記されている楚王の世系は、おおむね一致しており、浅野氏も、両文献を比較することによって「若干の食い違いは見られるものの、両者が記す世系がほぼ一致するとの結果が得られた」とし、「この点は、司馬遷がかなり信憑性の高い史料を用いて楚世家を記述したことを裏付けるものとなろう」と指摘する。

仮に、竹簡背面の劃線が連続するように竹簡を配列し、『楚居』の文字列を簡7→簡9→簡8の順に釈読したならば、武王以降の楚王の系譜は、「武王（簡7）→皇囂（莊敖）（簡9）→成王（簡9）→文王（簡8）」ということになり、文王の即位した順序が『史記』楚世家とは異なることになる。

もちろん、『楚居』と『史記』楚世家とが、基づく資料が異なっていたために、そもそも楚王の系譜に異なるところがあった可能性も一概には否定できないと思われる。また、先にも述べた通り、『楚居』簡8は残欠の無い整簡であるものの、簡7・簡9はいずれも下部が残欠し、その残欠部分にはおそらく四字程度の文字がもともと記されていたと推測される。仮に簡7→簡9→簡8の順に釈読した場合、簡7の文字列と簡9の文字列との間、また簡9の文字列と簡8の文字列との間には、それぞれ四字程度の文字が存在したこととなるため、その残欠した部分の文字によっては、簡7→簡9→簡8という形での釈読も一応は成立する余地があるものと思われる。

しかしながら、簡7→簡9→簡8の順に文字列を釈読した場合、文王の即位した順序が『史記』楚世家と異なり、『史記』と『楚居』とで武王以降の楚王の世系の中に大きな違いが存在することとなるのは、『楚居』の釈読においてかなり深刻な問題といえよう。

私見では、楚王の系譜について、敢えて『史記』楚世家における世系と一致しない形に理解すべき根拠となり得るものは、現時点では劃線の連続の他にはないように思われる。このため、そうした形での理解に対しては慎重であるべきであって、『楚居』の簡7・簡8・簡9の文字列は、簡7→簡9→簡8の順ではなく、『史記』楚世家における楚王の世系と一致する、原釈文同様の簡7→簡8→簡9の順に釈読するのが妥当と考える。

この『楚居』の簡7・簡8・簡9の文字列を、原釈文と同様に簡7→簡8→簡9の順に釈読し、もともとの冊書における竹簡の配列がそうした順であったとするので

あれば、この三簡については、その背面に記されている劃線は冊書の背面において連続しない形であったと理解しなければならない。このことは、劃線を根拠として竹簡の配列を復原することの有効性は限定的であることを意味する。

すなわち、『程寤』簡5・簡6・簡7・簡8の場合は、確かに竹簡背面の劃線が連続することを手がかりとして竹簡を配列し直すことが妥当と考えられたのであるが、『楚居』の場合は、竹簡背面の劃線の連続が竹簡の配列と一致する部分（簡3～6）が存在する一方で、竹簡背面の劃線の連続が竹簡の配列と一致しない部分（簡7～9）も併存しているとしなければならないと考える。こうした現象は、劃線のみを手がかりとして竹簡の配列を復元することは妥当ではない場合があり、劃線を竹簡の配列を復元する決定的な決め手と理解すべきではないことを示していると考えられる。もとより、『楚居』においては、竹簡背面に「簡序編號」がなく、また背面に劃線を認めることのできる竹簡が全体の半分にあたる8枚だけで、しかもその8枚に一本の連続した劃線が記されているわけでもない。竹簡背面の劃線が連続することと竹簡の配列との関係は、個々の文献ごとに、また個々の箇所ごとに、多方面から慎重に検討する必要があり、劃線を根拠として竹簡の配列を復原することの有効性は限定的であるとしなければならないと筆者は考える。

劃線を根拠として竹簡の配列を復原することの有効性は限定的であるのであれば、孫氏が言うように、『楚居』の竹簡が、竹簡の正面を上にして見て向かって左から右へと並べられていた可能性も一応は考えられるが、必ずしもそうではなかったとも考えられることになろう。つまり、竹簡の正面を上にして見た時の竹簡の配列が、向かって右から左の方向であったとしても、また向かって左から右の方向であったにしても、いずれにしても竹簡背面の劃線は連続していない部分が存在するのであって、竹簡の配列は、竹簡の正面を上にして見て向かって右から左へと並べられていた可能性も否定はできないと考えられるのである。

四、劃線と書写・編聯との先後関係

それでは、『楚居』における劃線は、そもそもどのような段階で記され、どのような意味を持つものなのであろうか。この点に関しては、なお慎重に検討する必要があるが、少なくとも『楚居』に関しては、竹簡上に文字列の書写・竹簡の編聯がすべて行われて冊書の状態と

なった後に、その背面に劃線が記されたとは考えがたい。『楚居』の竹簡背面に劃線が記されたのは、表面の文字の書写も編聯もいまだ行われていない段階だったと考えるのが自然と考えられる。

この点に関連して注目されるのが、竹節の痕跡の数及び位置が、劃線の連続との間に関係があると考えられる点である。すなわち、私見では、清華簡の中の或る同一文献において、竹節の痕跡の数及び位置の異なる竹簡が用いられている場合、竹節の痕跡の数及び位置の異なる竹簡の上にまたがって劃線が連続して記されている現象は確認できない。

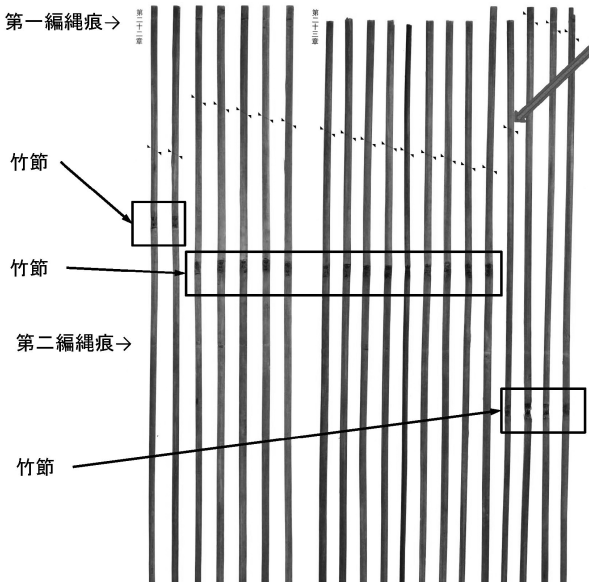
先述の通り、『楚居』においては、竹簡背面の上部と下部との二箇所に竹節がある竹簡（簡1～14）と、竹簡背面の中央一箇所のみに竹節がある竹簡（簡15・16）との、二種類の竹簡が用いられている。もっとも、『楚居』は劃線の存在する竹簡が少なく、竹簡背面の中央一箇所のみに竹節が存在している竹簡（簡15・16）には劃線が認められない。そこで、『清華大学蔵戦国楚簡（貳）』（中西書局、二〇一一年一二月）所収の『繫年』第22章・第23章を例として見てみよう。

『繫年』の竹簡背面には、配列を示す番号、すなわち「排序編號」がすべて記されているのだが、同時に大部分の竹簡背面には劃線が記されており、「排序編號」に従って竹簡を配列すると、竹簡上の劃線が前後に位置する竹簡上の劃線と概ね連続する。また、『繫年』においては、原釈文のちょうど章の区分にあたるところで、竹節の位置の異なる竹簡に変わっている場合もあるが、第23章・第24章のように、章の途中で竹節の位置の異なる竹簡に変わっている場合がある。

「排序編號」に従って竹簡の配列が復元された『繫年』第22章・第23章の竹簡の背面について見るならば、第22章第3簡（簡121）から第23章第9簡（簡134）までには連続した劃線が認められるが、その次に位置する第23章第10簡（簡135）の劃線はそれと連続せず、更にこの第23章第10簡（簡135）の劃線は、その次に位置する第23章第11簡（簡136）から同第13簡（簡138）に認められる連続した劃線とも連続していない。（図9）

この時、第22章第3簡（簡121）から第23章第9簡（簡134）までにまたがって存在する連続した劃線のある竹簡は、その前にある第22章第1簡・第2簡の竹簡と、図9に示した通り竹節の痕跡の位置が異なる。また、その後にある第23章第10簡（簡135）以降の竹簡とも、竹節の痕跡の位置が異なる。つまり、連続した劃線は、竹節の痕跡の位置が異なる竹簡にまたがって記されていることが

図9　『繫年』第22章・第23章の竹簡の背面の状況



ないのである。こうした現象は、『尹至』・『耆夜』・『楚居』及び『繫年』においても確認することができ、竹節の痕跡の数及び位置が、劃線の連続との間に関係があることを示していると考えられる。

およそ劃線が記された時期を考えるとなれば、書写や編聯が行われる前であれ、その後であれ、劃線を記すことはどちらも可能と考えることができる。しかし、竹節の痕跡に関していうならば、竹節は当然書写や編聯が行われるよりも前に竹簡の背面上に存在していたものである。竹節の位置や数の異なる竹簡の上に、劃線がまたがって記されていることがなく、竹節と劃線との間に密接な関係があるということは、劃線も竹節の痕跡と同様に、書写や編聯が行われる前に既に存在したと考えるのが妥当であろう。

このことの傍証となると考えられるのが、竹簡正面の文字列が有する内容上のまとまりと、竹簡背面の劃線のまとまりとが対応していない、という点である。

『繫年』の正面の文字列を見るならば、各章の末尾の竹簡には、文字列の終わりに墨鉤が記され、墨鉤から竹簡の下端までが留白になっている(注11)。こうした章末の墨鉤や留白は、竹簡正面の文字列の書写にあたり、書写者が各章の内容のまとまりを強く意識していたことを明確に示している。

『繫年』第22章・第23章の背面から明らかであるように、竹簡正面の文字列が有する内容上のまとまりは、竹

節の位置から見たときのまとまりと対応していない。従ってまた劃線の連続する竹簡のまとまりとも対応していない。こうしたことから見ても、竹簡表面の文字の書写や編聯が行われた後に劃線が記されたと考えるのは極めて不自然であろう。竹簡背面に劃線が記されたのは、表面の文字の書写や編聯がまだ行われていない段階であったと理解するのが妥当と考えられる(注12)。

おわりに

劃線・墨線に関して、現時点で筆者が大いに注目しているのは、北京大学が二〇一〇年に収蔵した秦簡牘である。『文物』二〇一二年第六期に掲載された「北京大学蔵秦簡牘概述」によれば、この北京大の秦簡牘には、その背面に「斜度不一定的刻劃痕迹」がある竹簡や、背面に「数道交叉墨線」がある木簡が含まれ、その「劃痕」や「墨線」は編聯の復原の参考になるものであったと記されている。しかも、『文物』に掲載された写真からは、この北京大学の秦簡には編縄がもとの状態のまま残っているように見受けられる。つまり冊書の状態がかなり良く保存されているようなのである。

そうであれば、この秦簡からは、竹簡正面の文字列の向きや、竹簡の背面の劃線・墨線が冊書において実際にどのような情況であったのかについて、かなり明確に把握することができるものと期待される。北京大学の秦簡に関する情報が早く公開されることを期待したい。

注

(1) 筆者は以前、残欠している断簡と断簡との綴合に関して、契口の位置が客観的な手がかりとして有効であると考えられることを論じた。拙稿「『曹沫之陳』における竹簡の綴合と契口」(『東洋古典学研究』第一九集、二〇〇五年五月)参照。

(2) 孫沛陽氏の指摘の内容は、「簡冊背劃線初探」(「出土文献与古文字研究」第四輯、二〇一一年一二月。論文の末尾に執筆時期として同年六月二十六日と記されている)において公表されたが、指摘自体は、もとよりこれよりも早い。その時期を筆者は正確には把握していないが、遅くとも復旦大学出土文献与古文字研究中心研究生読書会が「清華簡《程寤》簡序調整一則」を発表した二〇一一年一月五日よりも早くに行われている。なお、劃線・墨線に関して言及するところのある先行研究としては、他に『文物』二〇一一年第六期に発表された「北京大学蔵西漢竹書概説」をはじめとする北京大学蔵西漢竹書関連の論文や、賈連翔氏の「清華簡九篇書法現象研究」

（『書法叢刊』二〇一一年第四期、二〇一一年七月）、李天虹氏の「湖北出土楚簡（五種）格式初析」（『江漢考古』二〇一一年第四期、二〇一一年一二月）などがある。

（3）なお、以下筆者は、基本的に孫沛陽氏の「簡冊背劃線初探」に従い、竹簡背面に記されている問題の線を「劃線」と「墨線」とに区分する。

（4）以下、『楚居』の竹簡の写真及び他の清華簡の写真は、いずれも『清華大学蔵戦国竹簡』（壹・貳）（中西書局、二〇一〇年・二〇一一年）による。

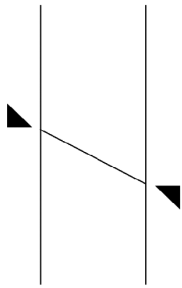
（5）前述の通り、簡7・9・10・11には竹簡の下部に残欠が認められるが、これらの竹簡は、二つある竹節を削った箇所のうちの下部のところで竹簡が断裂し、そこから竹簡の下端にかけてが残欠している状態である。竹節を削った箇所の強度が弱いために断裂が起きたと推測される。

（6）以下、竹簡の写真を用いて劃線及び墨線の位置を示すにあたっては、下の図10のように、竹簡上の劃線・墨線が竹簡の左端・右端に接する外側に、それぞれ三角形を記す形で示すこととし、写真の竹簡上には線を加えていない。

（7）包山楚簡の写真は『包山楚簡』（文物出版社、一九九一年）、また上博楚簡の写真は『上海博物館蔵戦国楚竹書』（6・8）（上海古籍出版社、二〇〇七年・二〇一一年）にそれぞれよる。

（8）この時の調査に関しては、『中国研究集刊』第五五号（二〇一二年一二月）所収の中国出土文献研究会「中国新出土簡牘学術調査報告―上海・武漢・長沙―」参照。

図10　劃線・墨線の位置の表示



（9）注2前掲の復旦大学出土文献与古文字研究中心研究生読書会「清華簡《程寤》簡序調整一則」参照。

（10）『中国研究集刊』第五三号（二〇一一年六月）所収。

（11）但し、第22章には文字列の終わりに墨鉤が無い。

（12）本稿の脱稿直前に入手した何晋氏の「浅議簡冊制度中之〝序連〟―以出土戦国秦漢簡為例」（『中国簡牘学国際論壇二〇一二：秦簡牘研究論文集』所収）において、何氏は、北京大学蔵西漢竹書の『老子』について韓魏氏が、劃線は竹の筒から竹簡が作成される前の段階で既に竹筒の上に記されていたと見るべきと指摘していること（『北京大学蔵西漢竹書』〔貳〕〔上海古籍出版社、二〇一二年一二月〕に収録されている韓魏「西漢竹書《老子》簡背劃痕的初歩分析」参照）に対して、同じ

竹筒から作られた竹簡ではなくても、劃線が連続して記されている場合があるとし、その例として清華簡〔一〕『耆夜』の簡10～12を挙げる。すなわち、この三簡は、竹節の位置から見ると簡10と簡11・簡12との二つに区分され、また簡10は斜めに断裂しているが、簡11・12の劃線の斜度・方向から見ると、簡10の断裂はこの竹簡に記されていた劃線にそう形で起きたと見るべきであり、従ってこの三簡には連続した劃線があったとしなければならないとするのである。しかしながら、下の図11のように、確かに『耆夜』簡11・12には連続している劃線が存在すると認められるが、簡10の断裂は劃線が記されているところで起きてはおらず、第10～12簡の三簡に連続した劃線があると見なすことは誤りであると筆者は考える。注目しなければならないのは、『耆夜』簡11も実は断裂しており、しかもその断裂は劃線のところでではなく、そのわずかに上の部分で起きている点である。このことは、簡10の断裂が劃線のところで起きたと見るのは妥当ではなく、簡10や簡11の断裂はそもそも劃線とは直接関係がないということを示していると考えられる。また、清華簡〔二〕の『繫年』においては、すべての竹簡の背面に竹節を削った痕跡とみられる箇所が一箇所ずつあり、またその箇所に「排序編號」が記されているのであるが、竹節の痕跡の位置から見ると『繫年』の竹簡は、簡1～44、45～69、70～95、96～120、121～134、135～138の六種類に区別することができ、しかも竹節の位置が変わるところをまたぐ形で劃線が連続して記されている現象は確認できない。簡69と簡70とについては、両簡とも劃線が認められるが、竹節の位置が変わるところをまたぐ形で劃線が連続して記されているとは見なしがたい。『清華大学蔵戦国竹簡（參）』（中西書局、二〇一二年一二月）に収められている各文献についても、筆者の見る所では、やはり竹節の位置が変わる箇所にまたがって劃線が連続して記されているという

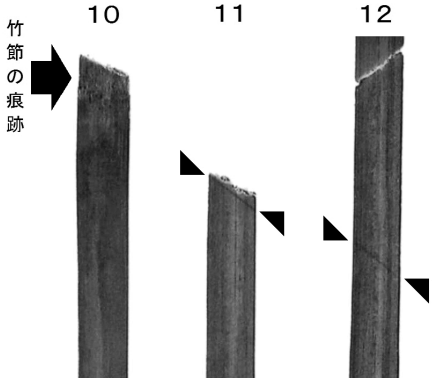


図11　『耆夜』簡10～12の背面

現象は確認できない。私見では、竹節の位置が変わる箇所にまたがって劃線が連続して記されていることはなく、竹節の位置・数から見た竹簡の分類は、劃線の連続との間にかなり緊密な関係が認められ、竹簡背面に劃線が記されたのは、表面の文字の書写や編聯がまだ行われていない段階と理解するのが妥当であると考える。

【附記】本稿は、科学研究費補助金・基盤研究B「戦国楚簡と先秦思想史に関する総合的研究」（研究代表者：湯浅邦弘）の成果の一部であり、筆者が二〇一二年十月二十六日に北京大学中国古代史研究中心において行った講演「有関戦国楚簡背面劃線、墨線与竹簡的排序問題」の原稿に加筆修正を加えたものである。また二〇一三年台湾奨助金による訪問学人として同年三月より台湾大学哲学系に滞在し、本稿を脱稿したことを特に記して深甚の謝意を表する。